

とろんの(太一や)通信

— 起の章 —



とろん

00坪の先祖代々の全ての山の土地を、あ!!!と譲り渡されたのだ。自分の手で全ての書類を揃え、登記完了までに8カ月もかかってしまった。

1969年の春、今から半世紀も前、「止むに止まれぬ、ふくらみ」で、高校卒業式の直後、18歳のボクは神戸港から大型貨客船に乗って、あ!!!とインドに渡った。それ以来、この「止むに止まれぬ、ふくらみ」は善悪美醜上下左右を超えて絶え間なくボクを突き動かし続け、第四弾の年には71歳に成る。ヒトやイノチ在るものはだれでも、自分の(はまりどころ)にハマると、「止むに止まれぬ、ふくらみ」に突き動かされるようになり、そんな日々を生き続

いのちは呼吸するもの震えるもの疼くもの。形も色も大きさもなく、有るとか無いとかもなく、善悪美醜上下左右などまるで関係なく、偶然でも必然でもないまったく〈当然〉な状態。止むに止まれぬ、ふくらみ。

これは、ボクが39歳の時に産み落とした言の葉、『とろんのダイジョーブ經典(ストロ)』(晩聲社刊)の一等最初の描きだし部分だ。21世紀に突入してスグ、ボクはタイ北部山中の桃源郷PAIに棲み着き、12年間暮らした。そして「止むに止まれぬ、ふくらみ」で村を創り始め、「止むに止まれぬ、ふくらみ」に突き動かされて2007年7月7日の七夕、(たましいのかくじっけん)第一弾、という名の祭りを起こし、七週間続行した。その本番に至るまでの3年間、この『なまえない新聞』に「とろんのPAI通信」というタイトルで(祭りへの誘惑文)を描き続けたのだけど、その一等最初の号の描きだしが、この39歳の時の言の葉、だ。

そして今回、こりずにまたもや、2022年2月22日から22日間の祭り(たましいのかくじっけん)第四弾に向けて、これから3年間(祭りへの誘惑文)を描き続けようとしている。ただ、今回は毎号ではなくって、年始めに一回、「起承転結」の四連弾の試みだ。まずは、今回、(起の章)。

祭りも四連弾で、今回の第四弾目は真冬の22日間@総社の山奥で、今までで最も短くって、もっとも寒い冬の厳しくってキモチのいい祭り。(たまたま必然)、祭りの最終日3月15日は、(とろん)という美しい響きの名をつけてくれた最初の愛妻(よっこ)の命日、30回忌。そしてその最終日の6日後に連鎖

する3月21日、春分の日、は、太一や七周年!!!メデタイこの日は、3.11直後に関東から九州に逃げ、福岡に到着してスグ、お風呂の中であ!!!と逝ってしまった旧友(春のうらら)の命日でもある。栃木の山中でギャラリー「ボカラ」を営みながら、毎年、ボクの一番好きな祭り風景を醸し出してきた稀に見るアーティスト、の12回忌。

(たましいのかくじっけん)は5年に一度起き、第三弾、2017年の66日間の祭りでは、最後の一週間に入って突如と「空間アートワークショップ」が始まった。(太一や)古民家の蔵の隣の建物が死にかけ、重い屋根が落ちていたのを、一気に解体、蘇生させゆく試みだ。朽ち果てたものを取り除き、瀕死の壁や柱などを蘇らせゆくワークショップ。74歳のアーティスト、一級建築士(松本 剛太郎)氏を頭領に、(宙心閣)と命名した新しいイノチに向かって始まった。

このワークショップは祭りが終わっても断続的に連鎖し、23回目のワークショップで屋根ふきが完成し、世にもフシギな展望風景を映し出す三階建ての(宙心閣)が誕生したのだ。沢山のひとたちのイノチが注がれ、第三弾の祭りの伝説的記念碑になった。

この23回のワークで「形」となった(宙心閣)は山世界への入り口となり、第四弾は、(たまたま必然)、同じ23、22日間+太一や七周年の1日=23日の祭りなので、太一や11000坪の山谷畑全域を祭り会場とし、この23日間で山中での「村づくり」を!!!!と想っている。3年間借りていた家や周りの土地が、(宙心閣)が誕生した瞬間、(うちゅう)が動き、大家さんから110

けてゆくと、う!!!!と(うちゅう)が動き、キセキが(当然)な「日常」を送るように仕組まれているのだ。

第三弾では(宙心閣)が誕生し、11000坪の大地が開かれ、そしてこの第四弾では山中に「村」が誕生し、前代未聞の(なにか)が開かれゆくのだろう。祭りで産まれ出たイノチの渦が「形」となり、「日常」に連鎖してゆく風景は、イノチ命いのちしていて、美しくって、感染力絶大!!!

この冬「大地の再生」のひとたちが太一やの山々にイノチを注ぎにやってきたり、ひとの手に助けられながら、見捨てられて荒廃してしまった田や谷に、(まこも)や(わさび)を植え、春には白い花を咲かす(蓮根)がやってくる!!!

そして、今、一面矢竹だらけの沢沿いの(村予定地)を切り開き、山中に気を通す作業がイチバン大変で楽しくって、「日常」がすでに第四弾に向かって疼き、動き始めている。

タイの自宅で産まれた長男(太一)は、タイで6年間過ごし、今、小学校六年生だけど、この祭りの直後、中学を卒業し高校生に成る。そんな小学生の(今)も、高校生に成っても、自分の(はまりどころ)にハマってさえいけば、自分がどこに向かってどんな花を咲かせるのかわからなくても、とにもかくも、善悪美醜上下左右を超えて(今)が疼きイノチ命いのちしていれば、ひとりで(命)が明日へと(運)ばれゆき、交換不可能な彼独自の「運命」が開かれてゆくのだから、

だから、アナタもボクも、

No Hurry !No Worry!! Norarikurari